会報
札響くらぶ
2023年 11月 第103号
編集・発行／札響くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

TAKETSU MEMORIAL SALON

第 37 回 札響くらぶサロン

8月27日（日）札幌コンサートホールKitaraのすぐお隣の豊平館で第37回「札響くらぶサロン」が開催されました。今回は新型コロナウイルス感染症対策で中止していた「パーティー」が3年半ぶりに復活。私もスタッフの一員としてワクワク感いっぱいでこの日を迎えました。

第1部は「札響定期演奏会プレトーク」。作曲家の八木顧問に10月から来年3月までの定期演奏会の聴きどころを、アーカイブ音源を使いながら楽しく解説していただきました。個人的にはマーラー作品としては異色と言われている、11月の交響曲第7番「夜の歌」。指揮者の下野竜也さんはこれをどう料理してくれるのか。実はこの前日の練習見学会にも応募しており、練習と本番の二度楽しむ予定なのです。そして来年2月には若手実力派のチェリスト上野通明さんが出演。東京勤務だった2012年に東京音楽コンクールで聴いた上野さん（弦楽部門第2位）がどれだけ進化しているのか。シーズン後半の定期演奏会も楽しみがいっぱいです。

ヴァイオリン 竹中遥加さん　堅実な技術を感じる素晴らしい演奏

第2部は「ミニコンサート」。札響ヴァイオリン奏者の竹中遥加さんをお招きして、シューベルト「ピアノとヴァイオリンのためのソナチネ第1番」、ポルディーニ（クライスラー編曲）「踊る人形」、ブラームス「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ第1番」、アンコールではブラームス（ハイフェッツ編曲）の「瞑想曲」を演奏していただきました。竹中さんのソロ演奏は過去2回しか聴いたことがなく、そのうち1回は清田区の「ふれあいコンサート」で大勢の出演者の中の1人。竹中さんの几帳面な性格と堅実な技術を感じる素晴らしい演奏でした。ピアノ伴奏はソロリサイタルを聴いたことがある中谷友美さん、譜めくりは札響チェロ副首席奏者猿渡輔さんの奥様でフリーのヴィオラ奏者猿渡美穂子さんでした。

第3部は待ちに待った「パーティー」。第2部で演奏していただいた竹中さん、中谷さん、猿渡さんのほかに、演奏会のPRを兼ねてチェロ奏者廣狩理栄さん、ヴィオラ奏者鈴木勇人さんも参加。各テーブルでは用意したビール・ワインを飲み、オードブルをいただきながら楽しい音楽談義が繰り広げられていました。私もたまたま猿渡さん、鈴木さんと同じテーブルだったので随分とお喋りさせていただきました。鈴木さんはなかなか個性的で楽しい人物でした。

今回はスタッフとして会場設営やパーティーの飲食物の搬入など裏方仕事もありましたが、記憶に残る充実した札響くらぶサロンでした。

会員／前島敏彦

鈴木勇人さん

廣狩理恵さん

中谷友美さん

竹中さんと中谷さんを囲んで
久しぶりの交流パーティー

1月～2月　定期演奏会　hitaruシリーズ定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

第658回定期演奏会
1月27日（土）17：00
28日（日）13：00
指揮　マティアス・バーメルト
テノール　イアン・ボストリッジ
ホルン　アレッシオ・アレグリーニ

■ブリテン　セレナード

ブリテンは同性愛者であったことは知られているが、そのパートナーはテノール歌手のピーター・ピアーズだった。『ピーター・グライムズ』や『戦争レクイエム』などほとんどの歌劇・声楽曲は彼の演奏を前提に書かれており、この作品も彼により初演されている。

この曲は8曲からなる連作歌曲集で、その8曲のうち1曲目のプロローグと最後のエピローグは、ホルンの独奏という極めてユニークかつ印象的な構成でできている。初演では伝説のホルン名手デニス・ブレインにより、優れた技巧で演奏された。今回もブリテン歌手として名高いボストリッジと名手アレグリーニのホルンの共演が大注目だ。

マティアス・バーメルト　©Y.Fujii

イアン・ボストリッジ　©Sim Canetty-Clarke

■ブルックナー　交響曲第6番

交響曲の大作曲家であったブルックナーだが、意外と自分には自信がなかったのか、交響曲を書くたびに、周囲の批判や忠告を受けて作品を何度も改訂している。ところが、この第6番にはわずかな補筆はあるが、ほぼ原典稿から変わっていない。よほどの自信作であったか、または周囲が忠告をするほど注目されていなかったからだろうか。

この作品は、宗教性が全体を支配し、「ブルックナー開始」や「ブルックナー・リズム」の執拗な繰り返しがおこなわれ、ワーグナーを彷彿とさせる金管の勇壮な響きをはじめ、オルガン風な壮大なオーケストレーションは、まぎれもなくブルックナーの交響曲だ。

hitaruシリーズ定期演奏会
第16回
2月8日（木）19：00
指揮　広上淳一
ピアノ　伊藤恵

■伊福部昭　土俗的三連画

この曲は、「日本狂詩曲」に続く伊福部の二番目の管弦楽作品で、当時林務官として厚岸で生活する中、この地での土俗的な生活への共感から生まれた作品である。3つの楽章から成っているが、各楽章にはアイヌたちの持つ律動の呼び名として「JIMKUU」や、アイヌ語で「背負う」という意味の「PAKKAI」などのことばがついている。伊福部は横浜でロシアの作曲家チェレプニンに短期間、作曲の指導を受けたが、この曲は彼に献呈されている。

アレッシオ・アレグリーニ
©Riccardo Musacchio　MUSA

■ベートーヴェン　交響曲第6番「田園」

「第5番」と同時期に書かれたこの交響曲は、性格の違う双生児のように言われるが、確かに「第5番」は動的で凝縮性があり、「第6番」は静的で広がりのある趣を感じさせる。ベートーヴェン自身の相反する性格が、それぞれに内包されているのかもしれない。しかし、この二つの作品のDNAには共通性もある。例えば第1楽章の1小節目のリズムは8分休符の後、8分音符が3つ続き、フェルマータが動機や主題の区切りをつけて本格始動すること。主題の動機がその後の展開部で利用しつくされるのもしかり。そして、何よりもこの2つの作品が後世の作曲家に極めて重大な影響を与えたこと、言い換えれば音楽史を変えてしまうほどの作品であったことだ。「第6番」はベートーヴェン自身が「田園」と名付け、楽章ごとに「田舎に着いたときの楽しい気分」と言った叙景的な標題を持たせている。この曲に物語性まではないのだが、べ

広上淳一
2023年6月札響定期演奏会より

ルリオーズの「幻想交響曲」の元祖でありロマン派交響曲の先駆けをなしていることは確かで、さらに「交響詩」の原点とも言えるかもしれない。楽器編成でも「第5番」同様、ピッコロやトロンボーンが新たに登場するのも興味深い。いずれにしても苦悩を乗り越え自然賛歌への境地に達したベートーヴェンの精神性をじっくりと味わうことができるだろう。

伊藤恵　©武藤章

■モーツァルト　ピアノ協奏曲第20番

この曲が書かれた時期は、モーツァルトにとって絶頂期と言ってよい。コンスタンツェと結婚してウィーンの一等地に居を構え、人々からの絶大な人気をはくしていたことは、彼の予約演奏会での集客数にも現れている。そうした中で生まれた二短調のピアノ協奏曲は、それまでの社交音楽としての協奏曲からロマン派を予告する芸術性の高いものへと深化させた。そして、ピアノフォルテという楽器の誕生は、豊かな強弱を曲想に込め、モーツァルトの音楽の源泉をさらに拡大させている。この曲が演奏された時、ハイドンは父レオポルトに「あなたの息子さんは、私が知っている作曲家の中で最も偉大な人です」と言っている。

第659回定期演奏会
2月24日（土）17：00
25日（日）13：00
指揮　尾高忠明
チェロ　上野通明

■エルガー　夕べの歌

原曲はヴァイオリンとピアノのための楽曲だが、作曲者自身が管弦楽をはじめ編成の異なる複数の編曲版を作っている。冒頭、弦楽器の静謐な響きが、「夜のしじま」を抒情的に表現し、エルガーらしい耳に馴染みやすい美しい旋律が、心を平穏にさせてくれる。中間部はテンポを増して日中の楽しい出来事を思い返すような趣がある。そして徐々にゆったりとしたフレーズにもどり曲は静かに閉じられる。この曲と対をなす「朝の歌」と比較して聴いてみるのも面白い。

尾高忠明
2023年3月
札響定期演奏会より

上野通明
©Anne Laure-Lechat

■エルガー　チェロ協奏曲

筆者は過去に尾高・札響によるこの曲を14年前に英国のチェリスト、ガイ・ジョンストンの情感溢れるボーイングが印象的な演奏で、さらに5年前のヴィオラのレジェンド今井信子による演奏で聴いている。今井の演奏はチェロより1オクターブ高いヴィオラが、冒頭からチェロの重々しい響きとは違う、清楚であたたかな音色で、じわりと心に染みこんできた記憶がある。

エルガー最後の大規模な管弦楽曲となったこの曲は、ドヴォルジャークのチェロ協奏曲に比べ、管弦楽の力を控えめに組み込んでいるため、室内楽のようなシンプルなオーケストレーションという印象を与える。そのためチェロの旋律線が明確に浮き上がり、この楽器の魅力が効果的に味わえる。映画「奇蹟のシンフォニー」にも用いられた扇情的な主題は、ロマン的抒情性に彩られ、しかも淡い憂愁をたたえている。昨年のPMFでも奥深くスケール感のあるチェロを聴かせた上野通明から、どんなエルガーが奏でられるのか、大注目のプログラムだ。

■エルガー　交響曲第2番

エルガーは50歳を過ぎてから2つの交響曲（3作目は未完で補完された第3番がある）を残したが、第1番を完成させた時、英国の小説家バジル・メインは「エルガーは管弦楽の分野においてイギリスを第一線に押し上げた最初の作曲家である」と評した。大好評を得た第1番から3年後に完成された第2番は、エルガーのスポンサーでもあった英国王エドワード7世に捧げるために、第1番が発表された直後から構想されている。それはエドワード王朝の叙事詩としての性格を強く帯びており、過去に対するノスタルジックな懐旧の情を呼び覚ませてくれる楽想からも感じられる。第1楽章からの雄渾な管弦楽の響きは国王に対する思いそのものなのだろう。しかし、この曲の完成直前に国王は崩御され、国王を追悼するための作品となった。悲しみを秘めた第2楽章が元の設計のなかに編入され、国王を讃えると同時に哀悼の念が加えられた。20年以上前に尾高忠明が札響で、この曲を力強さと柔らかさを対比させながら、より深みを増した弦の響きで聴かせたが、今回もこの作品の豊穣な味わいを堪能させてくれることだろう。

（写真協力　札幌交響楽団）

♪ 楽員さんに興味津津 36

オーボエ副首席奏者 浅原由香（あさはら ゆか）さんに聞く

室内楽へ挑戦し オケに還元していきたい

© K.Seki

プロフィール

東京藝術大学音楽学部器楽科・同大学院音楽研究科修士課程修了。学内にて大学院アカンサス音楽賞を受賞。これまでにオーボエを真田伊都子、池田昭子、和久井仁、小畑善昭、青山聖樹の各氏に師事。

第10回日本ジュニア管打楽器コンクールオーボエ部門第1位、第12回 国際オーボエコンクール・東京 第2位(最高位)、その他多数受賞。ソリストとして東京フィルハーモニー交響楽団、琉球交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団と共演。2021年5月には千葉交響楽団の第109回定期演奏会(指揮：山下一史)にて、R.シュトラウスのオーボエ協奏曲を演奏し好評を博した。

東京フィルハーモニー交響楽団契約首席奏者、千葉交響楽団奏者を経て、現在、札幌交響楽団副首席奏者。反田恭平率いるJapan National Orchestra コアメンバー。活動の場はオーケストラに留まらず、ソロや室内楽にも積極的に取り組んでいる。

金管は全く音が出ず！

生まれは東京都墨田区です。親の仕事の都合で住むところがいろいろ変わったこともあって、小学校は千葉県市川市、中学校は東京都文京区の学校に通いました。

4歳からピアノを習っていて、オーボエは小学校4年生から始めました。小学校の吹奏楽に入部する時に、体験としてすべての楽器を吹いたり、叩いたりしてみたところ、金管楽器は全く音が出ず、あとは木管楽器か打楽器か、という選択になりました。第一希望は打楽器だったのですが、「オーボエで音が出た人は他にいなかったのだから」と、顧問の先生にオーボエを指定されたのです。確かに、難しいといわれる2枚リードのオーボエの音を私は最初からスッと出せたように記憶しています。最初のうちは、先輩に吹き方を教わっていましたが、6年生になったころ、「もうちょっとオーボエを続けていきたい」と思い、プロの先生に習うことにしました。

一瞬のバスケット部…

中学校では一瞬バスケ部に入りました。音楽はもちろん続けたいけれど、それ以外のこともやってみたい、運動部ってどんな感じなんだろうと思ったのです。でも、練習に全くついていけなかったので、一か月でやめてしまいました。そのときに、やはり私には音楽しかないのだと思いました。中学校にも吹奏楽部はありましたが、オーボエのパートがありませんでした。私はそのころ既に自分の楽器も持っていましたので、「オーボエを担当できるなら入部します」と言ってみたところ、顧問の先生が「じゃあ、オーボエ・パートを作ろう」と言って下さいました。大変ありがたかったです。

ピアノのコンクール後　自宅にて

小学校吹奏楽部の初めてのコンサート

もっと上手になりたい

高校は都立高校への進学も考えましたが、音楽の道に進みたいという思いが強く、東京藝大附属高校を受けることにしました。受験に際して専攻をピアノにするのかオーボエにするのか、選択を迫られました。ピアノもずっと続けていましたが、私は、オーボエをもっと上手になりたい、このまま続けていきたいと思ったのです。また、そのころに習っていたオーボエの先生が出演する演奏会を聴きにいったこともオーボエの道に進むことを決めたきっかけのひとつになっています。先生が演奏されたのはリヒャルト・シュトラウ

スのオーボエ協奏曲でした。オーボエをこんなにも自由自在に操れるのかと衝撃を受け、憧れたことが、私のモチベーションを高めてくれました。

附属高から藝大へと入学すると、周りには強い意気込みと熱意を持った人がたくさんいて、日々刺激を受けました。この頃は朝早く学校に来て夜遅くまで練習して帰るというのが日課になっていました。

またここに座りたい

大学4年の時、最初にオーケストラのエキストラとして呼んでくださったのが札響です。それもゲスト首席奏者としてでした。隣には当時の首席奏者、金子亜未さんがいらして、指揮は尾高さん、曲はヨハン・シュトラウスの「こうもり」序曲や、ドヴォルジャークの交響曲8番でした。大学生の私をこんなに温かく受け入れてくださって、札響はいいオーケストラだ！と感じました。その年の12月に札響のオーディションがあり、オーケストラのオーディションは初めてだけどやれるだけのことはやろう、と受験しました。結果はついてきませんでしたが、得たものはとても大きいものでした。その後、いろんなオーケストラで演奏する機会がありましたが、澄んだ、クリアな音がする札響の記憶はずっと残っていて、何かのタイミングでまたあのオーケストラの中に座らせてもらえたらいいな、と思い続けていました。

それから6年後、２０２１年12月のオーディションに合格しました。それまで千葉交響楽団に2年間在籍しましたし、エキストラ奏者として首席や2番奏者、イングリッシュホルンなど、あらゆるパートを担当してきました。そうした経験はすべていま札響で活かされていると思います。

藝大のオーボエ同級生と

アンヌ・ケフェレックさんのピアノに心を洗われ

好きな演奏家といえば、昨年5月の定期演奏会で共演したピアニスト、アンヌ・ケフェレックさんです。一音一音に魂がこもっていて、衝撃を受けました。こんなに繊細な音、コロコロと歌うようなピアノがあるのか、と心が洗われるようでした。また聴きたい、と大阪でリサイタルがあると分かるとすぐにチケットを取って聴きに飛んでいったり、すっかりおっかけのファンです。来年3月にはキタラの小ホールでリサイタルがあると聞いているのでとても楽しみです。

作曲家ではリヒャルト・シュトラウスが好きです。人を鼓舞させるエネルギー、演奏者の心を開いて琴線に触れる作曲家だと思います。昨年の4月、札響に加わって最初の定期演奏会で「英雄の生涯」を演奏したのですが、そのときの演奏はオーケストラがひとつにまとまって、自分たちでも名演と感じるものでした。

今年10月の定期演奏会には世界的オーボエ奏者でもあるハインツ・ホリガーさんが指揮者として登場しました。84歳にしてあのパワーに、圧倒されました。この演奏会で演奏したのは私たちがあまり経験のない曲ですので、練習ではどうしても楽譜を読んでいる状態になってしまう瞬間がありました。ホリガーさんは一瞬で見抜き、「Don't read」「Feel the Music」と言ってくださいました。『楽譜を読むことが音楽ではない、その先にあるものを感じて表現することが音楽だよ』というその言葉は、深く心に残り、一生忘れることはないだろうなと感じています。

基礎練習にリード作り

毎日、基礎練習を1時間、曲の練習に2～3時間とることを日課としています。丸1日休みの日には基礎練習を増やしたり、曲の譜読みをしたりしています。そのほか、リードを作る必要があります。リード作りは、音に配慮する練習とは違い夜遅くても朝早くてもできる作業なので、隙間の時間をうまく使うようにしています。札響は演奏会の回数も多く、リードはどんどんと作らないと間に合わなくなってしまいます。たくさん作って使うのはそのうちの2割くらいでしょうか。最初から練習用にしてしまうものもありますし、練習やリハーサルで使いながら本番で使えるまでに育てていく（調整していく）こともあります。札幌は気候がよく、春から秋まではリードが作りやすく楽器もよく鳴るとてもよい環境です。ただ、冬は暖房や空調で空気が乾燥しすぎて…、初めての冬だった昨年はちょっと苦労しました。

小さい時　家族でスキー旅行に
北海道にも来ていました

趣味というわけではありませんが、整理整頓が好きで、時間がある時は部屋の片づけや掃除をすることでリフレッシュします。窓のサッシやお風呂の排水口など、普段の掃除ではできない細かいところをきれいにすることに没頭するのです。

身体を動かすことも好きで、ゴルフを少しやっています。小さいころから家族でスキーによく行っていましたので、今年はスキーに行くのが目標です。

室内楽の開拓を

札幌はキタラ小ホールやふきのとうホールなど素晴らしい室内楽ホールがある一方で、室内楽の公演は少ないように感じます。これからは、室内楽の演奏会を増やしていけたらいいなと思っています。室内楽で様々な作曲家の作品に挑戦していき、その経験をオーケストラで吹くときに還元していくことができればと考えているのです。また、札響には素晴らしいプレイヤーがそろっているので、一緒に室内楽に取り組んで、その面白味や楽しさを開拓し、お客様に紹介していきたいと思っています。

（担当　中居・村山・井上・塚田）

11年目のムジカ・アンティカ・サッポロ

わたくし物部憲一は札響に入団して来年で30年になります。ウィーンでの3年間の留学を終え、1994年の6月に入団しました。きっかけはその前の年にウィーンから参加したPMFです。私は関西の生まれで北海道には縁もゆかりもありませんでしたが、希望を胸に新千歳空港に降り立った瞬間を今でも覚えています。

札響の活動は想像以上に忙しかったですが、長年いつかは実現したいと思っていた古楽器でバロック音楽を演奏する機会が2009年頃から始まりました。当初小編成で行っていた古楽活動でしたが、仲間を増やし編成も大きくして2012年から始めたのがムジカ・アンティカ・サッポロです。年に二回の公演を行うのを目標に続けてきた活動も今年は11年目、計21回の公演を行ってきました。

2022年8月　結成10周年コンサート　於　ふきのとうホール

途中コロナ禍で全く活動できない時期もありましたが、様々な曲を取り上げ札幌の聴衆の方々にお聞き頂けた事は嬉しい限りです。またバロック音楽においては、バッハやヴィヴァルディなど有名な作曲家以外のあまり演奏されない作曲家の作品を多数取り上げた事も大変意義深かったと思います。平成29年には札幌市民芸術祭大賞を頂きました。そして結成10周年の昨年は、我が国古楽界の重鎮である鈴木秀美氏と若松夏美氏にご登場いただき2日間の盛大なコンサートを開く事が出来ました。

これまでどちらかと言うと無我夢中で突き進んできた感はあるのですが、この10年で積み上げてきたもの、また鈴木秀美さん、若松夏美さんに教えて頂いた事を大切にしてこれからの活動に邁進するつもりです。

10年を一区切りとするならば、今年2023年からは新たな11年目をスタートさせています。4月には今まで殆ど取り上げなかったイギリスの古楽を、9月にはバッハの作品の中でもとても異色な「コーヒーカンタータ」を演奏しました。この様に来年以降もこれまでアプローチ出来なかった曲を積極的に取り上げて行きたいと思います。また忘れられた、埋もれた作曲家の作品も皆様方にご紹介して行きたいと思います。

新たなスタートを切ったムジカ・アンティカ・サッポロ、これからの活動にご期待下さい。皆様のご来場をお待ちしております。最後までお読み頂きありがとうございました。

札幌交響楽団
ヴィオラ奏者
物部憲一

名曲コンサート　ポンマーの贈り物　ドイツ3大B」
「ドイツの本流」を味わう

札響を指揮するマックス・ポンマーを聴くのはいつ以来だろう。

首席指揮者の時に聴いたブルックナー4番は、少なくても私の好みではなかった。大好きな曲だっただけに、期待していた分落胆も大きかった。

次に聴いたのは、シューマンの3番「ライン」。1楽章から引き込まれ、静謐な3楽章、荘重壮大な4楽章と徐々に盛り上がり、5楽章で大きなヤマを迎えてこの曲の魅力を味わえた。私のポンマー評価は一気に上昇した。

今回は、コロナ禍を挟んでポンマー4年ぶりの登場である。最初はブランデンブルグ3番。確かな足取りで現れた87歳のポンマーは、棒や全身の動きで曲に細やかな抑揚を加え、表情豊かな音楽を導き出す。コンマス会田さんと弦楽のメンバーからは、アンサンブルの楽しさが伝わってきた。2曲目のベートーヴェン8番は軽妙洒脱な曲だが、軽さはさほど強調されず、偉大な交響曲作曲家の8番目のシンフォニーとして位置づけられた好演だった。

メインはブラームス4番。札響ではファビオ・ルイージの熱く柔らかい陶酔的名演や、エリシュカの恰幅のよい男前の演奏など、いくつかの名演奏が思い出される。

マックス・ポンマー
2023年8月26日
（写真協力　札幌交響楽団）

ポンマーの演奏はやや早めのテンポで、緩徐楽章も淡々と進む。4楽章でやっと出番となるトロンボーンも咆哮することなくバランス重視だ。動きは小さいがツボを押さえた指揮は、オケの自発性や自然な音楽の流れを生む。楷書ではない行書の味わいがあり、ブラームス特有の紫色（多田私見）のロマンに身を委ねることができた。札響はまさに手練れの演奏。

小澤征爾SKOのブラームス3番の録音を聴いた時、そのニュートラルな肌感覚がブラームスには合わず違和感を覚えたものだが、ポンマーはその逆。特に細工をするわけでもなく、あるべき音が確信をもって鳴っているだけなのだが、そこにはブラームスの圧倒的な音楽がある。だからこその「ポンマーの贈り物」なのかと納得した次第。

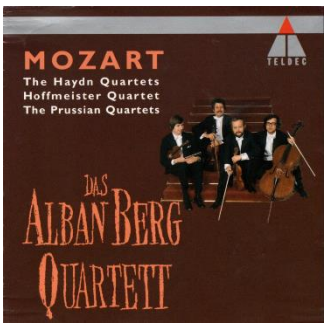
この日のポンマーは、なかなか良かった。もう一度札響を振ってほしいと切に願う。

会員／多田真一

僕の愛聴盤⑦

モーツアルトの理知と ぬくもりを自然体で表現

○弦楽四重奏曲第14番
ト長調 K387
（モーツアルト）
アルバン・ベルク四重奏団
（77年録音）



戦後すぐに刊行された小林秀雄の「モオツアルト」は、ト短調弦楽五重奏曲K516に焦点をあてた論評がとにかく異彩ぶりを放ち、一世を風靡した。青少年期、僕も夢中で読みふけったものだった。その小林はこの著書の中で、さらにK387の弦楽四重奏曲にも着目している。すなわち、この作品でモーツァルトは一大飛躍を成し遂げたのだと。この説には僕も大いに共鳴するところであった。

しかし、そうした詮索はそれとして、僕はこのカルテットをこよなく愛してきた。特に第3楽章アンダンテ・カンタービレ。優しく、深く放射される抒情が、水面を走り抜ける波紋のように聴く者の胸に広がるのだ。幸福感満点である。

アルバン・ベルク四重奏団が1回目に録音したディスクが、ウィーン・スタイルの伝統と近代的緊張感を兼ね備えて、まことに高度な音空間を創り上げている。ギュンター・ビヒラー以下4人の奏者の作品への限りない共感が、ディヴェルティメントやセレナードの機会音楽に喜怒哀楽の旋律を戯れとともにまき散らした青年期のモーツァルト、そして思索の深淵をのぞきこむ壮年期のモーツァルトと、作曲者の深化への分岐点を実に典雅にかつ知的に示しているのである。室内楽の極みであろう。

加えて「ジュピター」交響曲K551のフィナーレを先取りするような最終楽章、ソナタ形式とフーガの絡み合いも、彼らの手によって才気煥発に、バランスよく処理され、鑑賞後の高揚感がたまらない。

モーツァルトの弦楽四重奏曲中1、2を争う名盤となっているのだ。

○交響曲第39番
変ホ長調 K543
（モーツァルト）
オットマール・スウィートナー指揮
シュターツカペレ・ドレスデン
（75年頃録音）

まずは序奏部分のしなやかさとくすんだ音色に吸いよせられる。ヴァイオリンが、32分音符で構成される変ホ長調の音階を爽やかに駆け降りる。そして吉田秀和氏が絶賛（「古典の複雑と精妙について」―吉田秀和全集第2巻―白水社、1975年）したトニカの主題が聴く者を天上の楽園にいざなう。なんと満ち足りた瞬間なのであろう。

スウィートナー率いる古都ドレスデンのオーケストラは、上等の木材が発するぬくもりと光をモーツァルトの傑作から引き出してくれた。伸び縮み自在のリズム、森の中の木々が呼吸をむらなく繰り返すようなバランス感覚、かつてウィーン・フィルを指揮したイシュトヴァン・ケルテスの溌剌とした名演とはひと味もふた味も異なる変ホ長調交響曲である。

1970年代中頃は、永い歴史を誇るシュターツカペレ・ドレスデンの黄金期だったのではなかろうか。スウィートナーという名匠を得たこのオーケストラは矢継ぎ早にモーツァルトの作品で存在感を主張し、ファンの耳目を釘づけにした。歌劇『魔笛』K620も惚れ惚れする出来栄えであった（グロッケンシュピールがチェレスタで代用されているのが唯一残念だが）。機能的、鋭角的な表現を求め続けた現代のオーケストラ界にあって、木目肌の音色はかえって新鮮な印象を与えたものだった。

その代表的存在がK543のシンフォニーである。旧東ドイツの貴重な遺産。

会員／村岡範男

運営スタッフ活動報告 上半期（4月～9月）

○4月17日(月)
運営会議 9名出席

○4月22日(土)
札幌市内中学生招待活動
琴似中学校 15名

○4月23日(日)
定演終了後茶話会 12名参加

○5月14日(日)
第36回札響くらぶサロン
豊平館 40名参加
第1部 PMF開幕前プレトーク
PMF組織委員会事業課長
渡辺史子さん
第2部 ミニコンサート
ヴァイオリン 檀本朱音さん
ピアノ 永沼絵里香さん

○5月15日(月)
運営会議 9名出席

○5月22日(月)
会報101号発送

○5月28日(日)
札幌市内中学生招待活動
厚別中学校 32名

○5月28日(日)
定演終了後茶話会 9名参加

○6月19日(月)
運営会議 11名出席

○6月25日(日)
2023年度総会
出席22名+委任状91名
交流会 23名参加

○7月10日(月)
運営会議 12名出席

○7月23日(日)
JOFC山形昼食会 +
東北UNITED鑑賞会
「札響くらぶ」から5名参加

○8月21日(月)
会報102号発送
運営会議 13名出席

○8月27日(日)
第37回札響くらぶサロン
豊平館 52名参加
第1部 プレトーク
札響くらぶ顧問 八木幸三さん
第2部 ミニコンサート
ヴァイオリン 竹中遥加さん
ピアノ 中谷友美さん
第3部 交流パーティー

○9月9日(土)
札幌市内中学生招待活動
陵北中学校 35名

○9月10日(日)
札幌市内中学生招待活動
東月寒中学校 29名
前田北中学校 25名

○9月10日(日)
定演終了後茶話会 8名参加

○9月18日(月・祝)
運営会議 15名出席
親睦会 14名参加

第656回札響定期演奏会（10月8日）
ホリガーの「弦チェレ」を聴いて

ハンイツ・ホリガー指揮のバルトーク「弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽（弦チェレ）」を聴いた。84歳を迎え、4年ぶりの来日であった。『夜』をテーマに近現代曲で構成し、自身の作品「薄明」も指揮した。ソプラノのサラ・ウエゲナーが5つの俳句をドイツ語で詠い、オケが神秘的なトーンで包み、多彩な打楽器と特殊奏法は、視覚と聴覚を楽しませてくれた。

「弦チェレ」は、指定の配置と少し違っていた。弦5部を2群に分けて左右に配置するよう指定されているが、ヴァイオリンだけ左右に分け、他の弦楽器は左右に分けずに配置され、ヴィオラは左後方、チェロは右後方、コントラバスは右側面に並んでいた。チェレスタ、ハープ、ピアノはヴィオラの背後に陣取り、打楽器群は後方の雛壇にのっていた。そしてホリガーは弦楽器に挟まれるように立った。

私にとって「弦チェレ」はバルトークのなかでは異質で、不気味さを感じる曲であり、それだけに難解な印象を持っていたが、ホリガーはそれを払拭してくれた。弦楽は曖昧さが無く伸びやかに響き、アンサンブルは緻密で立体感があった。開演前のロビーコンサートで、鶴野さんがバルトークの「無伴奏ヴァイオリンソナタ」を見事に独奏していた。「弦チェレ」では、この難曲を弦全員で合奏しているように感じられ、緊張感が漂っていた。

チェレスタ、ハープ、ピアノと打楽器は、奥行きのある響きによって変化を与え、弦を際立たせていた。弦も打楽器と一体化し、寸分のズレのない「バルトーク・ピチカート」は爽快であった。第3楽章（夜の音楽）冒頭のシロフォンは拍子木のように響かせ、楽章の最後は微妙に歪ませていた。第4楽章はバルトーク特有の民族的な色合がスリリングに展開され、多彩に変化しながら勢いよく突き進み圧巻の終結となった。これを聴き私は、厳冬期に向かって慌ただしく変化する北海道の大自然を感じた。

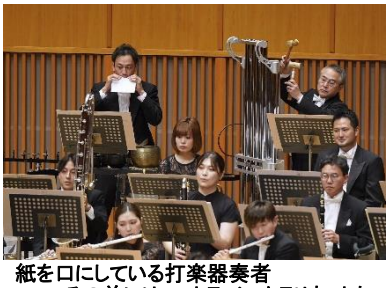
またいつか、ホリガーが札響を指揮してくれることを期待したい。

会員／高木誠一

第656回札響定期演奏会（10月7日）
オーボエ 指揮 作曲 そして ピアノまでも

今から五十数年前（1970年）、札響と共演したハインツ・ホリガーの演奏を聴いた。もちろん指揮者としてではなく、オーボエ奏者のホリガーである。曲はリヒャルト・シュトラウスのオーボエ協奏曲。目くるめくような指の動きと音の流れは今でも思い出すことができる。

そのホリガーが今日は目の前にいる。P席最前列にいる私には棒を振る姿がよく見える。なんと明解で的確な指揮であることか。ホリガーの棒を見ながら素人の私でも「拍」をしっかりと数えることができた。演奏された曲はバルトークの「弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽」以外、馴染みのないものばかりで、私にとっては難解であったのだが、ホリガーのわかりやすい指揮がそれを救ってくれたような気がする。



紙を口にしている打楽器奏者
その前にはコントラバスクラリネットも

2015年以来、ホリガーは度々札響に客演をしている。時には「弾き振り」、時には今回のように自分の作品を携えての共演。今日はさらにアンコールでピアノ伴奏を自ら行うというサプライズもあった。これはもちろん共演者サラ・ウェゲナーのためではあるが、札響（聴衆）へのプレゼントではなかったのか。そして演奏後の楽員に対する称え方も通り一遍ではなかった。心をこめて奏者を立たせ、称賛していたように感ぜられた。

最眉目というか、私の願望も多分に含んでいるのだが、この日はホリガーの札響に対する愛情を強く感じた。

自作自演となった「薄明」はホリガー自身がドイツ語で詠んだという俳句を音楽に昇華させたような曲であった。

鈴（りん）も多数

そこでは珍しい楽器がいくつも使われていた。バスフルート、コントラバスクラリネット、ウオーターゴング、オーシャンドラム、レインスティック、そして鈴（りん）などなど。初めて聴いたこの曲とともに永く記憶することになるだろう。

会員／村山英朗

（写真協力　札幌交響楽団）

スタッフの声

▼オペラ「ドン・カルロ」を観た。斬新かつ現代的でレジーテアター的な演出に賛否はあったものの、歌手の演技と歌、オケも合唱も指揮も素晴らしかった。しかしながら空席の多さに愕然とし、悲しくなった。行楽日和の3連休の初日と中日、札響定期と同日開催、若干マイナーな演目、と様々な要因はあったにせよこれでは主催者と出演者に申し訳ない。

「まだまだ遠いな」という想いが頭に籠る…。（吉川）

▼10月28日、Kitara大ホールで開催された札幌市民芸術祭の新人音楽会を聴きに行った。オーディションを通過した総勢22名、時間にして5時間、皆さんとても素晴らしい演奏だった。「札幌市のKitaraフアースト・コンサートや札響くらぶの中学生招待活動などで音楽鑑賞した生徒たちが、また聴きたい、いつか演奏してみたいと感じて成長した姿かな…」と終演後にふと思った。（上野）